

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

退魔剣士
綾那
ダークサクリファイス

小説 天戸祐輝

挿絵 中島秋彦

第一章 月明かりの少女剣士

第二章 森く闇の使者

第三章 清き肢体に刻まれた刻印

第四章 蝕まれる精神と誘う美肉

第五章 護りし者

第六章 ダーク・サクリファイズ

006

021

040

103

149

195

登場人物紹介

Characters



みしばあやな
御柴 綾那

古の時代より人々を護っている一族に生まれた、強い霊力を持つ少女。たぐいまれな容姿とスタイルを持ち、性格は凜として気丈、人には優しく魔に対しては冷酷。

みしばなぎね
御柴 風音

綾那の姉。綾那と同等の霊力を持つ。大人の色気漂う妖艶な美貌。一族に有望視されていたが、身命を懸けて人々を護る事に嫌気がさし、一族を裏切り魔に堕ちた女。

ジュダ

風音の僕。全身が隆々とした筋肉で覆われた、残虐な化け物。

きづちりょうや
木槌 了夜

綾那のクラスメート。

たるだ
樽田

番長を気取る巨漢の不良。

くわみずよう
桑水 葉

綾那の後輩。中性的な顔立ちをした少年。

「くあああああああつ！ あくつ、ひぎイいいいいいいんっ！」

桜唇から初めて悲鳴が洩れた。股間の真下から立ち昇る魔氣に包まれた肢体は切なく苦しい痛みと、甘いくすぐつたさの両方に襲われている。身に着けていた制服は魔氣風に煽られてバサバサとはためき、スカートは捲れる際に陵壊に裂かれ、前後に淫猥なスリットを作られてしまった。スカートが完全に捲れ現れた花柄の白シヨーツは魔氣に煽られた刺激に女芯を現せて淫裂が濡れ始め。チャームポイントの栗髪のポニーテールは上空へと捲き上がり、蠟燭の炎のようにユラユラと揺れ靡いている。

「私の目的の為に綾那、貴女の肉体が必要なよ、素直に従って貰えるかしら」

刀から魔氣の放出を止めた妖女はグツタリとした美女の貌をしゃくり上げ、言う事を聞かねば命はないとばかりに冷たい視線で睨み付けた。

「誰が……貴女の言う事なんて聞くものですか……、聖氣さえ……使えば……」

敗北の屈辱を味わわされ、少女は悔しさに桜唇を血が滲むほど噛み締め妖女から美貌を背けた。両手のグローブは靈氣を送っているにも拘わらず未だ聖氣を放出する事はなく、鏡刃が退魔の機能を再動させる事もない。

「聖氣さえ使えれば……ね、クスクスクス……それでさつきからグローブに靈氣を送り続けているというの、バカな妹ね」

「何がバカよ、貴女も御柴の者だったのなら分かるはずだわ、むざむざ邪羅の雌めすにされる訳にはいかない事くらい！」

自分を嘲笑う妖姉に激昂する。敗北し捕らえられた自分を見下す姉の態度が我慢できないのだ。

「私がバカだと言ったのは貴女の無知さ加減によ、貴女……もしかして聖氣は自分の霊力をグローブで変換する物、とでも考えているのではなくて」

「何を言ってる……」

風音の言っている事が理解できない。綾那は御柴の者にそう教わっているのだ。

「聖氣とは精氣の事、己の肉体を使って人と交わり相手から奪う物なのよ。貴女の填めているグローブはその精氣を貯める為の道具ではないわ」

「そんなの嘘よつ、私は一度だつてこの身を穢した事はないわ！」

「ええ、そうでしょうね、貴女が今まで聖氣として使っていた精氣は私が昔貯めておいた物なのだから」

「そんな言葉で私は騙されない、嘘を吐くならもつとマシな嘘を吐きなさい！」

言葉とは裏腹に少女の心は動揺していた。姉の言葉が本当なら聖氣が復活する事はないとなれば、今の自分には邪と戦う力はなく、逃げる事も難しい。

「強がるなんて可愛い綾那、貴女を苦しめないように私の仲間にしてあげる」

愛おしむように妹の若美貌に美貌を近づける妖女。穢れない可憐な唇を奪おうと妖しく緑瞳を光らせ、赤く妖艶な唇を近づけていく。

「誰が貴女のような邪な女になるのですか、私はみんなを、この学園を邪羅の淫手から

護るって任務が……」

「フンッ、まだそんな事を言っているの、だったらその人間たちが護るに価値がないゴミだ
って事を先に教えてあげなくてはね！」

何度も邪な者の精を吸ったであろう穢らしい手が制服の上を這い、サマーベストの胸
元を膨らませていた二つの果実を包み込んだ。

「あうっ、何をするつもりよ！」

「ふふ……、黙っていないさい、いい思いをさせてあげるわ」

妖女は濡れた声でそう言いながら綾那の首に貌を寄せ、白い首筋に赤い舌を伸ばし這わ
せ始めた。

「んあう……くう……」

淫らな舌使いでアンダーシャツと首の境目を嬲られ、退魔少女は生理的な反応で肢体を
硬直させ眉間に皺を寄せる。淫女と化した姉の舌が唾液を首に塗す度に処女の肢体にはゾ
クゾクとした未知の感覚が趨り、首から下の肌がムズムズと痒くなっていく。

「可愛いわ……綾那、首を舐められただけで声を出すなんて……、こうしたらどうなっ
ちゃうのかしら？」

風音の左手が制服に添って滑り降り、今度は裾からアンダーシャツの中に入り込み肌を
優しく撫でながら胸へと近づいてくる。

「こんな事やめなさい、私は恥辱など何とも思わない！」

強気な言葉を吐いても貌の火照りは抑えられない。頬はジュダの前で肌を嬲られる恥ずかしさに赤く染まり、唇は胸を制服越しに揉まれる刺激に堪えようと強く嚙み締めている。だが、そんな仕種が男を興奮させるスパイスだと処女退魔師は気づいていない。

スカートの裂け目から下着を晒し、同性に上半身を嬲られる今の姿は、それだけで男の情欲をそそるには十分な姿だ。しかも、アンダーシャツに差し込まれた手に白い腹部を晒されているにも拘わらず、Cカップの美乳を包む下着を見せないチラリズムは、男を興奮させる最高の調味料だ。現に、目の前に居る上条の邪羅は姉妹揃って白と赤の下着を晒し、白い腹部を見せた美少女の姿に欲情して、巨大な体軀に相應しい幼児の足大の巨根を勃起させている。

(こんな姿を邪羅に見せるなんて……)

屈辱に若美貌が歪む。今自分に恥辱を与えている人物を睨めば、妖姉は首筋を舐めながら制服の下で白い肌を撫で回し、ウツトリとした瞳で首肌を見ている。

「本当に綺麗な肌……、まるで男の匂いがしないわ……」

「ふざけないで、私に触れな……ふあああああうっ！」

同性のしなやかな左手が清楚な白いブラジャーに包まれた果実にそっと触れ、その肌を確かめるように触れるか触れないかの微妙なタッチで撫で回してくる。カップの中の美乳は初めての感覚に柔肌を騒ぎ立たせ、鳥羽で優しく触れられたようなくすぐったさが処女の全身にムズ痒さを伝え、敏感な頂きがカップの中でムクムクと尖り始める。

「あらあら随分敏感な肌だこと……、ならこれはどうかしら」

「くうああ！ くうっ……ふうううう……！」

妖女は楽しむように妹の果実を掴み、大きな円を描きながら揉み上げ美乳の形を淫猥に歪ませる。尖り勃った乳芯はブラジャーの裏地に擦れ回り、下着の布を押し上げ花柄の一部となつて乳首の形を現した。

初めての刺激に抗う術を持たぬ少女は唇を噛み締めたままうなだれ、美貌の横からポニーテールを流して否定する事のできない肉房の刺激に瞳を強く瞑つた。

「気持ちいいのでしよう綾那、我慢せず声を出しちゃいなさい」

「こんな事のどこが気持ちいいと言うの、私は何も感じっ!? ああっ！ ひいやああああああああああんんっ！」

退魔少女は突然頭を振り、悲鳴とも喘ぎともつかない声を荒らげた。汗の吹き出した全身は感電したかのように痙攣し、栗色のポニーテールは彼女の頭を追うようにユラユラと左右に乱れ揺れる。

少女のスカートに目を移せば、若い肢体を支える為に股間真下に突き立てられた陵壊が再び魔氣を立ち昇らせていた。処女の秘裂を布越しに刀峰で触れていた邪刀の魔氣は秘所を包む絹布を通り抜け、清らかな淫部を淫らな魔氣で灼いていく。処女退魔師は白い布の中で秘裂と美尻を撫で回すように灼く魔氣のおぞましさに身を震わせ、何の抵抗もなく閉じたままの二つ穴から胎内へと侵入し、穢れのない秘肉の一枚一枚に絡まり雌の喜びを刻



んでくる邪な氣に精神を砕かれそうになる。

「御柴の者がそんな声を上げていいのかしら、フフ……たったこれだけでこんなに肉体の快楽を感じるなんて、初めから私に嬲られるのが目的だったのではなくて？」

「ふぁうう……、ふざけるな……くっ……私と穢らわしいお前を一緒にしないでっ」

淫部から胎内を灼くおぞましい感覚に堪え、御柴の女剣士は勝ち誇った淫ら笑みを浮かべる妖女を睨み付ける。その瞳にはまだ諦めの色はなく、邪羅を召還した元凶だけは倒すという覚悟の光が輝いていた。

「うう……風音、貴女だけは……倒すわ！」

若い肢体を嬲られながらも、少女は最後の力を振り絞って片手にぶら下げていた鏡刃を両手で握り姉の身体へと向かわせる。今の少女では上条の邪羅であるジュダを倒す事はできない。だが、人である風音であれば鏡刃で貫く事はできる。若き退魔剣士は自分が陵辱されるのと引き替えに、穢れ者たちを現召させた元凶を葬る道を選んだのだ。

「くううっ、綾那！」

「この勝負は引き分けね、姉さん！」

戸惑う事なく焦燥する妖女に刃先を向かわせていく。躊躇する事はできない。穢れを知らぬ退魔剣士にとって、この攻撃は自分の身を邪羅に穢される代償なのだ。

ガシッ！

鏡刃が赤いレースブラジャーに包まれた極大スイカの峰乳谷間で止められた。綾那が自

らの意志で止めた訳ではない、刀の柄を握った彼女の両腕には一本の触手が何重にも力強く絡まり、その動きを封じているのだ。

「あぶなかつたぞ、風音」

ドストドスツと教室の床を踏み締め、巨大なジュダが右肩の触手を退魔少女の両腕に絡めたまま近づいて来る。まるで上部だけ巨大な砂時計をイメージをさせる奇怪な姿の岩鎧邪羅は、それだけで不気味な畏怖を放っていた。

「ありがとうジュダ……、まさかまだ反撃をするなんて思わなかつたわ」

安堵の息を吐き妹を見る妖女。切れ長の瞳は怒りの炎を灯し冷淡に輝いている。

「自分の身を犠牲にしても私を殺すつもりだったのね……、だったら私と同じ苦しみを教えてあげるわ、精気の貯め方と一緒にね！」

「ああっ!？」

怒りに満ちた妖女の手がアンダーシャツの裾を掴み、ブラジャーもろとも制服の上着を胸上までずり上げた。夜の教室には眩い美少女の白い肌が現れ、胸先がツンツと上を向いた釣り鐘型の果実が冷えた外気に晒される。汗を輝かせた白肌の双乳は持ち主の呼吸に併せて上下に揺れ、姉の愛撫によって発情した鶺鴒色の頂きは小指の先ほどに尖り、プクツと真円に膨らんだ乳輪の先でフルフルと震えた。

「くう……」

悔しさに呻き、胸に突き刺さる視線に貌が真っ赤に染まっていく。

「フフ……綺麗な色だこと、ジユダ、この妹に教えてあげて」

指先で乳輪の形を確かめるように辿った妖女は淫らな笑みを浮かべ、少女の股間下を通つて肢体を支えていた陵嬢を引き抜いた。

「うあくっ……」

陵嬢の支えが外された後も退魔剣士には倒れる事が許されない。両腕に巻き付いた触手が二の腕を捻り上げ、頭上で縛り吊り上げていく。

「御柴の処女が……、楽しんでそうだ」

「やめ……、触るな……くううっ!？」

ジユダのもとに引き寄せられた処女退魔師は嫌らしく歪んだ眼に晒され、汗に濡れた双乳を巨大な手に包まれた。邪羅の為すがままニユムニユと揉まれ形を変えるCカップの美乳、柔肉は陵嬢者の指の間から果肉をプニユッとほみ出させ、尖り勃つた乳芯が掌で押し潰されて転がされる。少女は初めて感じる心地いい圧迫感に吐息を洩らしてしまった。

「いい揉み心地だ、このしつとりと手に吸い付いてくる感じは風音にも劣らない、これならばいい我らの雌になるぞ……」

若い美乳を横から搾り包むように揉み方を変えるジユダ。強調させられた桜色の頂きは涎を口端から流す角張った貌が近づき、唾液まみれの口腔へと吸い込まれていく。

「ひいやあああつ……やめ……吸うな……ひいやんんん……」

チュパッ……チュル……チュレロ……

自分の胸から淫猥な吸い音が聞こえてくる。その音が鳴る度に生暖かな口腔に包まれた胸肌にはザラついた邪舌が這い回り、可憐な頂きを舐められ、乳輪を舌尖がなぞり吸い上げていく。美胸はその度にくすぐったさとムズ痒さが併さった奇妙な感覚に苛まれ、今まで知らずにいた全身の性感が高まる。肉果実の中心はジユダの舌に灼けた針金でも穿たれたかの如く熱く灼かれ、痲り勃った乳首に誘発されて肉房全体が張り始めた。

「くうっ……穢らわしい舌を這わすな、んくううっ……あうっ！」

舌の陵辱に反応し始めた自分の肢体を否定し、懸命にジユダに抗う処女退魔師。吊られ双乳を嬲られた体勢のまま何度も足をばたつかせ、ニーソックスに包まれた美足を岩鎧身に打ち込む。

「グヒヒ、暴れる暴れる、抵抗すればするだけ俺は楽しめるのだからな」

カブッ！

「ひいいうううううッ!?」

口腔で嬲られていた乳芯に牙が起てられた。牙はそのまま桜色の頂きを貫くかのようにグリグリと噛み締め清き肉房を食っていく。綾那は乳首を食られた痛みと言葉を失い、抵抗していた美足をダラリと垂れ下げた。敏感な頂きに穴を穿たれたような痛みと刺激に両手の力は抜け、鏡刃がガシャッと音を立てて床へと落下する。

「痛あああああッ！ 胸が……喰うなああああッ！」

肉体の一部を失うような傷みに瞳を見開き悲鳴を上げる退魔少女。邪な口を離そうと胸

を左右に振ってみるが、唾液まみれの邪口が頂きから離れる事はなく、逆にジュダの陵辱心を煽る形となっている。乳首を噛まれた傷みは徐々に薄れて心地いい痺れと化し、初めての感覚で処女退魔師の脳を混乱させ始めた。

「乳首を噛まれただけでこんなに反応するとは可愛いじゃないか御柴、それならばこっちも愛でてやろう」

「やめ……、これ以上私に触れるな！」

唾液に濡れた左胸から手が離され、処女肌に触れながら下半身へと下りていく。少女はジュダが何をしようとしているのかを悟り、処女の本能が素早く両足に力を込め白い太股を摺り合わせた。だが、力の差が歴然とした上条の邪羅に退魔剣士とはいえ少女の力が敵うはずもない。スカートの中に滑り込んだ人外の手は白い太股を無理矢理こじ開け、シヨーツ越しに穢れのない淫裂をなぞり上げた。

「んふううううっっ！」

布越しとはいえ秘裂を触られ、退魔少女は肢体をピクンと跳ねさせ顎を仰け反らせる。

今にも泣き出してしまいそうな貌は恥辱に染まりきり、シルク布の中で開き始めた肉ピラはその感触を陵辱者に教え、ジュダは淫裂の陰影を見せる濡れた股布の上で指を滑らせた。ジュシユ……又チャツ……ズチャツ……又チュツ……。

辺りにはシヨーツの淫裂をなぞり愛液を染み出させる陵辱指の音が響く。シヨーツの染みは除々に濡れ幅を広げて処女蜜を染み出させ、陵辱者の指を濡らし始めた。

「あらあら何の音かしらこの濡れた音は、まるで娼婦のような音だこと」

「くうんんっ……やめ……ひゃあん……んあ！」

退魔剣士の痴態を嘲り笑う妖女。自分の濡れた音を聞かされ続ける綾那は屈辱に貌を染め、必死に与えられる肉悦を拒み抗い続ける。

「ジュダ、見せて頂戴、その妹の淫らな場所を」

「クク……、いいだろう……」

陵辱邪の残っていた触手が括れた腰に絡み付き、触手に縛られていた両腕がグイッと下方に引かれる。肩関節を軋ませ肢体を上下反転させられた退魔剣士はスカートを完全に捲り返され、清純な白いショーツをジュダの眼に晒した。太股を擦り合わせ濡れた股布を隠しはしたが、夜の冷えた空気が濡れた布越しに股間部を包み、愛液にまみれ熱を帯びた秘唇をヒヤッとした風が第三の陵辱者となつて撫で上げていく。

「いい加減素直に嬲られたらどうだ、御柴あ！」

「うああっ！ や……やめろ、穢らわしい手で私の足に触れるな！」

ニーソックスに包まれた足首がジュダに握られ、細足が左右に無理矢理広げさせられていく。足に力を入れてもグイグイと開かされていく両足はYの字に固定され、愛液に濡れ透けたクロッチから薄く開いた淫唇の卑猥な形を見せてしまった。

「いざまね綾那、貴女のオマ○コが丸見えよ」

「穢らわしい眼で見ないで！」

誰にも見せた事のない淫部を言葉にされ、羞恥しめうちに身が震える。太股を閉じようとしても穢れ者の力に両足はピクリとも動かず、逆に貞操筋が扇情的に浮き上がって陵辱者の眼を楽しませてしまっただけだ。

「ククク……美味そうだ」

「ジュルッ……ヂュジュル……」

「くう……っ、うはあああつ……やめ……あふつ……」

淫質な音を立て、ショーツの染みに長い舌が這わされる。初々しい色を透けさせ淫唇の形を現せた布に這わされる舌は的確に四枚の肉淵を辿り、処女の淫部にザラついた舌の感触と穢れた邪羅の唾液を擦り込んでくる。

「くうあああつ！ やめろっ……そんな所を舐めるなあああ！」

幾度も淫裂を舌で舐り快楽電流を流され綾那は、肉悦に感じる声を抑える事ができなくなり始めていた。口では抵抗を続けていても可憐な桜唇からは断続的に吐息が洩れ、黒い猫瞳が淫らに潤んでいく。淫部に舌が這わされる度に内腿筋はピクッピクッと痙攣を繰り返し、溢れた愛液がショーツをお臍の方まで濡らしてシルク地を透けさせ、綺麗な二等辺三角形に生え揃った草むらと小さく佇む淫核の姿まで現せてしまった。

「随分と気持ちよさそうね、なら直接舐めて貰ったらどう？」

舌を這わされているショーツに陵辱の刃先が向けられた。

「んあああつ……、やめて姉さん！ ああつ!？」

プチッ!

素早く振るわれた風音の刃がショーツの左腰を切断した。ゴムに引かれ小さく縮んだ白布は股間からずれて右太股に絡まり、股布を失った処女部にジユダの淫眼が突き刺さる。

「淫らな鳴き声を唄わせてやる」

「や……やめ……くうあああああつ! あつ、ひくつ、くううううつ!」

何の遠慮もなく這わされる舌が薄い草むらを掻き分け、敏感な淫核を齧り唾液を塗していく。器用に包皮からピンクの肉芽を剥き出され、ザラついた舌で包み舐められる刺激に少女は美貌を左右に振り乱して悶え、悦楽の極電流にあられもなく声を上げた。逆さにされ下に流れたポニーテールは床の上で泳ぎ、肉悦の凄まじさを物語るように乱れている。

「ひやうう……、なっ……そんな……そこ大事な……あふっ……舐めるなああああつ!」

「ククク……そんな姿でやめろと言われてやめる奴がどこにいる」

口の周りを涎まみれにさせたジユダは肉芽から舌を離し、淫唇の中で愛液にまみれ濡れ光る処女孔に舌を移した。

「んうくううう……、そんなとこ……ああ……」

胎内への肉輪をなぞり辿る舌先に処女退魔師は身が震える。だが、女性の本能は異物の挿入を望んで秘孔をヒクヒクと蠢かせ、陵辱者の舌を迎える準備を整えている。

「お前も淫女の素質があるようだな、この穴がそれを物語っているぞ」

「うるさいっ、お前のような奴に穢されても、私は邪な世界に墮ちたりなどしないわ!」

(悔しい……視線が胸とアソコに集中して……、私はそんな女じゃないのに……)

樽田たちの視線がしゃぶられて揺れる双乳と、スカートのスリットから覗ける歪に膨らんだ黒下着に集中している。視線は淫蛇の力で幻手と幻舌へと変わり、醜悪美男子と共に胸と淫裂を嬲り肢体を陵辱してくる。悔しくとも桜唇から洩れる濡れた声は抑える事はできず、秘孔から淫らな水音が奏でられる度に退魔少女の肢体はピクッピクッと痙攣し子宮が切ない収縮を繰り返す。樽田や子分たちの幻手や幻舌が少女の胸や淫裂に触れる度に、秘孔から生まれたおぞましい悦流が背筋に趨り、ゾクゾクとした痒さで処女脳をくすぐり、全身から発情の汗が吹き出していく。

「ンふああああああつ、も……つ、もうダメ、私またイッチャ……ンあ……」

スカートを持ち上げ陰影を見せる桃尻を前後に振り乱す美少女。今の彼女にとって唯一穢れない孔を指で穿たれ人前で喘ぐその姿に、邪を払い人を護る気高き退魔剣士の姿はない。一匹の淫欲を求め尻を振る雌と化していた。

「んあつ、イクツ……んあああ、イッチャ……」

ヂュチャツ……。

体重が消失し、頭の中が真っ白になる肉悦の頂点に達しようとした直前、処女孔から指が引き抜かれ、淫部を嬲っていた手が黒下着の中から出ていく。同時に美乳を貪っていた口も揉んでいた手も肢体から離れ、了夜の体温が身体から離れていった。

「どうして!? あと少しで私……」

そこまで口にして少女はあとの言葉を飲み込んだ。自分が本心から肉欲を欲している事に気づき、退魔剣士としての誇りが揺らいでいる。

「随分気持ちよさそうだったじゃないか綾那、今度は俺の番だ」

綾那を絶頂寸前で生殺しにし、醜悪美男子は姿勢よく立って赤紫のズボンの股間を若美貌の前に突き出し陰影を見せ、テントを張った部分を処女の瞳に映らせる。

ゴクッ……。

喉が上下に動き、生唾が喉を流れ落ちていく。

(私……欲しがってるの……!?)

了夜が何を望んでいるのか分かる。そして、樽田たちの前でそういう行為がどんな意味を有しているかも……。だが、今の彼女にそんな事は気にならない。淫蛇に激しく疼く肢体を鎮めるにはどうすればいいのか、それしか考えられないのだ。

(これは精気を吸収する為にするのよ、決して肉悦が欲しくて……)

自分に対する言い訳を心に、退魔剣士はアスリート体型の男の前で細腰を曲げて膝を着き、躊躇しながらズボンのファスナーを赤いグローブ手で下ろしていく。

(こんな言葉言うべきじゃない事は分かってるけど……)

「精気を……ください……」

男に屈服し初めて口にする言葉。残っていた正常な理性は若美貌を急激に火照らせ、形のいい耳まで赤く染めて口にしてしまった言葉の羞恥を肉体に教えてくる。

(……男の人の匂いが……、身体が熱くて……燃えてしまっ……)

ムツとした雄の欲情臭を嗅いだ処女退魔師は自分の中の女が目覚めていくのを感じた。嫌いな男に淫らな行為をする背徳感が心の中でゾクゾクとした興奮へと変わり、開けたズボンの中にグローブを填めた右手を差し込み、トランクスの中から鋼の如く堅く勃起した熱いペニスを優しく握り取り出す。

「大きい……」

思わず声が出てしまう。醜悪美男子のペニスは片手で少し余るほど肉幹が太く、全長が三十センチはある巨根と呼べる代物だった。龟头はエラを大きく広げて太く、トイレで尻処女を貫いた葉のモノがオモチャのように見えるほどだ。綾那は目の前で反り返る肉幹をウツトリと見つめ、グローブ手で扱きながら桜唇を開き可憐な舌を向かわせた。

「私が入前でこんな事をするなんて……、はむ……むん……んチュむうんん……」

人前でする口淫に躊躇しながらもピンクの舌は赤黒い龟头を舐め回し、エラ裏を舌先で撫で這わせ、肉幹全体に舌平を押し付けながら口腔へと収めていく。可憐な唇の中に醜い肉幹が消えていくにつれ一回り太い先端は口腔を満たし、喉の奥粘膜を押し広げて喉を埋め尽くした。

(また喉が広がっていく……太いモノが喉を膨らまして……苦しいけど……)

「んぶあん……んチュ……チュパッ……むうふう……」

息苦しさに被虐の喜びを感じ、欲情に瞳を潤ませた退魔剣士は頭を前後に振り始めた。

桜唇が淫らに捲り返り、唾液にまみれた肉幹が唇外に現れる度に口淫のしゃぶり音が更衣室に響き、少女の喉の膨らみが上下に移動する。

「んあんぷ……喉がきもひよふて……ふチュッ……熱いれろ……ンプッ……いい……」

くぐもった声に併せて唾液が口唇の端から零れ整った顎に伝っていく。肢体は彼女の興奮を物語るように乳芯を限界まで痲り勃たせ、スカートの中からはパンティから滲み出た愛液がポタポタと滴り、床に着いた両膝の間に匂い立つ処女池を広げ始める。

「俺より成績のいい学年トップの君が、その清純そうな貌でペニスをしゃぶり舐め回すとは、そんなに俺のモノが美味しいのかな？」

人気も成績も自分より上の美少女に口淫をさせ自尊心を満足させた了夜は、股間で前後する栗髪を両手で押さえ込み、大きなストロークで美喉を貫いた。

「んふあつ……ンプッ、んっ、んあ、ふあむ……ンプププ！」

（やだっ、こんなに激しく……でも……でもっ！）

予想していたとはいえ喉へのピストンを始められた綾那は苦悶の声を洩らす。喉粘膜を肉の切っ先で滅茶苦茶に突き上げ外部の白い喉肌はその陰影を浮き現せたペニスは、学園一の美少女を自分の物にしたとばかりに数人の男女の前で挿入を繰り返した。

「くそっ、了夜様、俺もう我慢ができねえ！」

淫らに唇を歪ませ、揺れる美乳を晒す退魔少女の姿を見せられていた樽田が我慢の限界を超えた。ドシドシと歩き口淫する美少女の横に立つと自らズボンを下げ、その巨漢な身

体に似つかわしくないほど小さなペニスを取り出し、イラマチオする若美貌に向ける。

「俺のは扱けよ、その綺麗な手でギョッと握ってな」

ポニーテールを揺らしながら横目で新しいペニスを映す処女退魔師。デブツとした腹に埋もれるように勃起した陵辱肉は恥垢にまみれ、いつ射精したかも分からない精液が爛れた亀頭にこびり付いている。触る所か見るだけでも吐き気を起こす汚い代物だ。

「んっ、んっ、ンプア……イふヤあ……はむう……んっ、ンぷっ、ンんん！」

了夜のペニスを喉に詰め込みながら首を振り拒む。だが口腔のペニスの持ち主がそれを許さない。上から見下す冷たい目が『手淫をしろ』と命じていた。

（こんな汚いモノ……触りたくないのに……）

余っていた手を怖ず怖ずと小根に絡め軽く握る。小さな手に包まれただけで亀頭以外の全てが見えなくなるペニスは堅いながらも腐肉のような弾力を持ち、それだけで背中には悪寒が趨り、その熱で可憐な手が腐食していくような錯覚を感じる。

「ヒヒヒ……あの生意気な御柴が、了夜様のをしゃぶりながら俺のチンポ握ってらあ」

嫌らしくガマ口から涎を垂らした樽田は、自分の股間を握るグローブ手の上から両手を重ね、退魔少女の手をより強く短小肉根に絡めさせた。

「もつとちゃんと扱けよ、こうやってな！」

しなやかな指が離れないように固定し、ガマ腹がタプタプと揺れ腰が動き始める。強制手淫を始められた細指には恥垢がこびり付き、グローブには先走りの液が染み込んできた。

「むふうあつ!? イヤッ汚いつ、こんなモノ私に……ぶふあ!? んあ……んん……」

巨根を口唇から吐き出し悲鳴を上げる。だが、その唇は喋る事を許さない了夜が再び肉槍を突き刺し、頭を抱えて喉奥を貫いた。自分のペニスをしゃぶりガマガエルのような樽田に手淫させられる美少女を見てさらに興奮したのだろう、その腰つきは激しさを増して喉粘膜をエラで引つ掻き、狭い喉にズボズボと太い亀頭を詰め込んで陵辱を繰り返す。

あまりの激しさに処女剣士の黒瞳は見開かれ、捲れ返る桜唇からは唾液が飛び散った。

(苦しい……喉が壊されて……っ!?)

太い亀頭が喉奥を突き刺す度、喉肌を内部から突き破られてしまいそうな恐怖に怯え身体が震える。白い肢体は双乳を大きく弾ませ、肉交に興奮した汗を尖り勃ったピンクの胸先から飛ばし、光を反射させてキラキラと床に降らせた。

「んぷっ、んあ、ンふあチュぷうんン! んぷうああつ!」

瞳を潤ませ二人の男に奉仕を続ける綾那。淫蛇が発動した肢体は人前で羞恥な行為を晒している事など忘れ、一心不乱にペニスをしゃぶり汚物の短小肉根を扱く。

(こんな事……私は嫌なのに身体が燃えそうで……、淫蛇が疼いて……)

前後に揺れる視界。ふと周りに瞳を向ければ、部屋の隅に固まっている女生徒たちが貌を顰め、口唇と手で奉仕を続ける自分を軽蔑するように睨んでいる。

(違う……違うの! 貴女たちを護る為に、みんなを護る為に仕方なく、好きでこんな淫らな行為をしている訳じゃ!)



「んぷうあつ！　ンッ、ンッ、ンッ、ンチュパ！」

グローブ手で肉幹を抜き、口腔で吸飲し喉を締め付ける退魔少女。持てる限りの淫技を駆使して唇を捲れ返し長いポニーテールを淫らに揺らす。くぐもった吐息はペニスをしやぶらせる男だけでなく周りの男をも興奮させ、淫根を握らせたままの樽田は再び射精を始め、肉果実を尿混じりの精液で汚しピンクの乳首から濁液の糸を引かせ滴らせた。

「クク……、淫らな雌だな綾那、僕のは一滴残らず飲み込めよ！」

高揚した貌で荒い息を繰り返す了夜は栗色の頭を押さえ付け、今まで以上の勢いで口唇を貫き喉の最奥に熱い龟头を詰め込んだ。

ドビュプッ！　ビュビュッ……ピプウウウウウウウ！

「ンプッ!?　んく……んふあんんんんんんん——ッ！」

口腔の肉根が激しく脈動し喉に収めた龟头が弾ける。様々な運動で鍛えられた了夜のドロドロしたゲル状の白濁は瞬く間に肉槍を締め付けた喉を満たし、口腔へとマグマのように灼熱した雄粘液の水位を上げてくる。

（いっぱい出てる……私の口に好きでもない人のが……）

口腔を満たし終え、華唇の端からトロリと零れ始めた火傷しそうな粘液の苦みに吐き気を催し、舌にトロッと絡まる粘度の感触に嫌悪しながらも綾那は必死にコクンコクンと喉を上下に動かせ、醜悪男の濃い体液を自分の唾液と混ぜ合わせ胃に流し込んだ。

「んくっ……ゴクッ……んぷあ……んくんく……」

(どうして？ 飲んだのに……達する事ができない……)

口腔の粘液を全て胎内に落としても尚、彼女は肉槍をしゃぶり肉筒内に残っていた残滓まで吸い上げ続けた。ジュダの時のように精液を飲めば淫蛇が発動し、蟲が肢体中を貪り絶頂に達せると思っていた。だが肉体は悦楽の頂点に昇りきる事はできず、それ所か精液という新たな媚薬を注がれ、溶岩に落とされたかのように燃え始めてしまったのだ。

「ンチュパッ……んはあああつ！ 熱いつ、身体が熱いの……燃えてるうううつ！」
残滓のなくなった肉槍から桜唇を離した美少女は両腕で自分の身体を抱き締め、天を仰いで悲鳴を上げた。もう淫蛇で敏感にされた肉体が限界だった。精液を浴びた胸や喉、そして胃の中が溶岩のように煮えたくり、淫炎で美肢体の内外から全てを灼いて脳から理性を奪い、肉悦を欲する精神だけが残らされていく。

「助け……頭の中で熱くなって……、私に変に……変になっちゃうよおおおつ！」
(ああっ！ 誰か助けて、頭の中で炎が燃え盛って……、熱い……熱い……！)

肉欲に対する最後の抗いの言葉を機に、綾那の心から抵抗心が消え始めた。

「ああああ！ もうダメッ、頭が燃えてアソコが火照って……、欲しいの！ 熱くて……身体を中から灼くモノが、私の中を滅茶苦茶にする堅く熱いモノが！」

長いポニーテールを振り乱し狂乱する退魔少女。焦れに焦らされた肢体は二つの美乳を大きく弾ませ、秘孔からは放尿したように大量の愛液が溢れ床の池を拡大させている。

「まるで雌犬のような姿だな、学園一の美少女が台無しだぞ」

ドストと最奥を貫く子宮姦に肢体が痙攣し、脊髄を駆け登り直接脳を刺激する痛みを伴う痺れに頭の中がバチバチとスパークを始め肉悦以外の感覚がなくなっていく。膣はもつと強く巨大ベニスを感じようと腰を激しくくねらせ、両手は近くにあった熱い触手を握り先端を自分の貌に向けて扱きたてる。触手に巻き付かれ絞られた美乳は大きく揺れながら緑の体液にまみれて甘く痺れ、尻孔に至っては胃の中で射精律動を続ける触手で完全に機能を壊され、肉幹をきつく締めながらも噴き出すように白濁を飛び散らせた。

「あふうッ……、あッ、あッ、あッ、ひいああああッ！ イク……私もうイク……お尻も胸もオマ○コも痺れてもうダメなの……あうッ……んああああアアあッ！ ツ！」

壊れた美貌に笑みを浮かべ淫少女は肢体を震わせ始めた。膣内は激しく振動しながら蠕動を繰り返し、白い腹部が上下に波打ち始める。触手を扱うグローブ手は肉幹に指を喰い込ませるほど強く握り、ピンク色の乳首が母乳を噴出させようとピクピクと震えた。

「んあんんん……、イクッ……いくの……、了夜様あああああッ！ イクうううううううううううウッ——ッ！」

乳首から母乳を天井まで噴き上げ綾那は絶頂に上り詰めた。全身には子宮から生まれた何万ボルトの快楽電流が駆け巡り、膣は肉幹が潰れるほど強く締め付け秘孔から愛液を飛沫させる。下腹部はビクンビクンと波打ち、瞳からは歡喜の涙が溢れ壊れた笑みの頬を濡らし流れていく。

「ククク……立派な雌だ……、処女の癖に子宮まで犯されて達しやがった、しかもこんな

にきつく締め付けやがって、そんなに欲しければもつと出してやるよ！」

ジュプッ、ズニユッ、ジュフプッ！

四肢に肉縄が絡み大の字に拘束し、肢体を陵辱する触手と共に伸びて退魔剣士を天井近くまで持ち上げていく。了夜のペニスも触手同様に伸び、子宮へピストンを続けながら肢体を持ち上げ秘孔から愛液を飛び散らせた。両胸はカップが二つほど小さくなるくらい触手が亀頭を押し付け、潰れ破裂してしまうような心地いい痛みが趨っている。

「んあッ！ あうッ、あうッ、はんッ……んふッ……」

滅茶苦茶に突かれる肢体は壊れてしまうほど揺さぶられ、栗色のポニーテールが激しく宙を泳ぐ。ボロボロの制服はもう衣服としての機能を果たしてはなく、右半分が残された白いブラウスは体液で緑に染まり、ボロボロになったスカートは殆ど残っていない裾をヒラヒラと翻して陵辱者の眼を楽しませている。

「ククク……、いい姿だ雌、我らに反抗した償いを身をもって味わえ！」

膣内を埋め尽くした肉槍がビクビクと震え筒内に精液を駆け登らせ始めた。亀頭は一回り膨らみ、子宮内で先端が開いているのが分かる。綾那はやつと膣奥に精液を浴びられる喜びに淫らな笑みを浮かべ、また来るであろう絶頂感に身を震わせた。

「おお……出るぞ綾那、くっ……おおおおおおおおおオオッッッ！」

ドビュルッ！ ビュルッ！ ビュルビュルビュルビュルビュルッッッ！

「んひいいいいいいいいッ！ 出てるッ！ 私の中で……子宮でええええええッ！ イ

クッ……私また……まらああああああアああアああア——ッ！」

女の最奥を灼くマグマのような雄液の熱さに、退魔少女は立て続けの絶頂に昇らされた。雷が身体中を駆け巡るような感電に肢体はガクガクと痙攣し、スパークし続けた脳が痺れて溶けていくような錯覚を感じる。子宮内は瞬く間に古びたオイルのような粘度の高い陵辱液に穢れ、子宮口を広げながらドロドロリと膣襞に絡まりついていく。膣はビクビクと震えながら精を登らせる肉幹の脈動を如実に感じ、子宮から溢れてきた陵辱液に満たされ灼かれ始めた。

「まだ出るぞ、まだっ！ 身体を白く染め上げてやる！」

胸を觸っていた触手が一齐に射精を始めた。震えながら噴乳を続ける乳首も柔肌にもドブドブと白濁がかけられ、粘液色に染まり肌に雄の熱が染み込んでくる。

「んあああッ！ 身体が熱いのッ！ 子宮も膣もお尻も熱くて……あうッ！ 壊れる……私が壊れるううううううう——ッ！ ッ！ ッ!!」

絶頂が止まらない。肌を觸っていた触手が全て射精を始め、熱い粘液で身体を灼いていく。両手ではビクビクという脈動と共に精を吐いた触手がうねり、赤いグローブに先端を押し付けながらヌルヌルとした粘液で白く染めている。美貌には次々と先端が向けられて幾重にも白濁が塗り重ねられ、噎せ返るような匂いに包まれた。ポニーテールはとつくとシドシドに穢され、栗色の艶髪を白く染められてその毛先から粘液の糸を垂らした。

「ひあうんッ！ あふあッ！ イイのッイイッ！ もっと出してッ、私の身体ビチョビチ



熱い雌絶頂を迸らせた。

「ククク……、よかつたぜ綾那、お前は最高だ、これからは番として俺に従え、快楽を与え続けてやる」

「あうあッ！ あうッ……ひいやふはッ……」

長い射精を美少女の胎内に吐き出し終え、ゆっくりと穢れた肢体を大の字に吊り上げていた空中から床に降ろす了夜。半分千切られたブラウスにニーソックス、そして赤いグロームとクリスタルのペンダントだけという肢体は、綺麗な所がないほど白濁に染められ、噎せ返る精臭に包まれている。

「んあ……はあ……はあ……はあ……」

床に仰向けに降ろされ触手やペニスを引き抜かれた肢体。だが散々嬲られた尻孔は閉じる事はなく、開いたまま陵辱液の絡み付いた腸壁を晒している。処女だった秘孔は穢れを知らなかったのが嘘のようにポツカリと口を空け、ベツトリと濃い精液の纏わり付いたピントクの膣襞を晒し、亀頭で貫かれた子宮口まで見せていた。尻孔からは逆流した白濁がダラダラと溢れてはいるが膣からは少量しか溢れず、あまりに濃い粘度の為に膣内に蜘蛛の巣のように絡まり、子宮内ではネットリと壁に絡まって離れようとせず白い腹部はまだ臨月の妊婦のように膨らんでいる。

「フフフ……どうだった綾那、邪に落ちた感想は？」

峰乳を晒した風音が少女の瞳を覗き込み、優しげな声で訊いてくる。綾那の黒瞳は邪に

落ちた証に妖姉と同じ淫靡なエメラルド色に染まり、淫らに濡れ輝いていた。

「はあ、はあ、はあ……よかつたわ……オマ○コもお尻も痺れて……あう……まだイッているみたい……ンああああッ！」

呼吸に併せて美乳を上下に揺らし、胸元のクリスタルのペンダントを輝かせる淫少女。彼女は陵辱液まみれの美貌で笑みを作り、二つの頂きからまだピュッピュッと噴乳を続け白濁に染まった肉果実を自らの母乳でさらに白く染めている。

「ふふふ……可愛い綾那、今度はみんなで楽しませよう……」

妖女は黒スカートの中から青紫の紐パンティを脱ぎ捨て、淫液まみれで寝そべる美妹の上に肢体を重ね白く染まった美乳を揉み乳首を吸い上げた。

「あんん……」

「美味しいわ……、綾那のオッパイ、挿入しなさいジュダ、リョウヤ……、貴方たちの太いモノでオマ○コを激しく貫いて、私たちを悶え狂わせて……」

了夜の触手が姉妹の肢体に絡まり垂直に立たせていく。二体の邪羅はそれぞれの番の後ろに向かうとポツカリと空いた秘孔と真っ赤に爛れた色の小さな秘孔へと巨大肉槍をグイッと突き刺し、フルピッチで腰を振り始めた。

「んあああッ！ いいわ……いいッ！ もっと激しく突きなさいジュダッ！」

「あふうあんんッ！ スゴいわ了夜様ッ……もっと……もっと犯してッ！」

姉妹は抱き合い、互いの胸を揉みながら喘ぎ始めた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>